

意志と理由把握

対馬大気 (Taiki Tsushima)

東京大学

ある人が理由に基づいて行為するとき、そこで起こっているのはどのようなことだろうか。一つの考え方は次のようなものだろう。まず、行為者が一定の目的に向けられた欲求と、その目的の実現手段についての信念をもつ。次いで、これらの欲求と信念が、それらの内容に見合うような行為を引き起こす。この描像を、「欲求－信念モデル」と呼ぶことにしよう。

欲求－信念モデルは、理由に基づく行為の適切なモデルになっているだろうか。この問いに答える際には、欲求という概念の多義性に注意を払わなくてはならない。とりわけ、私の考えでは、以下の二種類の欲求を区別することが重要である。①個別的な事態を目的としており、その事態が実現されれば消えるような種類の欲求（個別的欲求）。②概括的な事態を目的としており、個々の場面でその事態がある意味で「実現」されても、消えることのないような種類の欲求（概括的欲求）。この区別を踏まえたうえで、本発表では、まず以下の二点を示すことを目指す。

- A) 欲求－信念モデルにおける欲求を個別的欲求に限定する意味で理解した場合、欲求－信念モデルは理由に基づく行為の一部分しか捉えておらず、その意味で不十分な描像しか与えない。
- B) 欲求－信念モデルにおける欲求を概括的欲求も含むような意味で理解した場合、欲求－信念モデルは、理由に基づく行為の粗雑な描像しか与えない。

更に、欲求－信念モデルの批判的吟味を踏まえて、理由に基づく行為の代替的なモデルを素描する。その代替的モデルは、欲求と信念ではなく、以下の二つの概念を中心に据えるものである。①一定の状況を一定の行為の理由として捉えるという心的態度を指す、「理由把握」という概念。②どのような状況をどのような理由として捉えるのかについての行為者の観点を指す、「意志」という概念。

約言すれば、本発表では、以下の主張を説得的に提示することを目指す。すなわち、理由に基づく行為のモデルとして、欲求－信念モデルよりも意志と理由把握を中心に据えたモデルの方が適切である。